

風見鶏の館

風見鶏の館（旧トーマス邸としても知られる）は、神戸を代表する建物で、その名前の由来となった風見鶏は異人館街のシンボルとして親しまれています。この優美で威厳のある建物は、1909年頃にドイツ人貿易商のゴットフリート・トーマスのために建てられました。木造建築ではありますが、神戸の異人館の中でも特徴的な、外壁をレンガで覆い、半地下部分を御影石で装飾した珍しい建物です。この建物は、20世紀の最初の数十年間に日本、中国、韓国で多くの重要な公共建築や私邸を手がけたドイツ人建築家ゲオルク・デ・ランデ（1872-1914）によって設計されました。

風見鶏の館の内部は洗練された感性を示しており、威厳がありながらも遊び心も感じられます。この建物には太い梁や濃い色の木工など、伝統的なドイツのデザイン要素が取り入れられています。ステンドグラス、真鍮のドアノブ、照明器具、装飾的な戸棚の蝶番や金具にはユーゲントシュティール（ドイツ・アールヌーヴォー）運動の特徴的な装飾要素が組み込まれています。家は精巧な木製の塀に囲まれており、高い格子状の門にはトーマスの出身地であるライン川沿いのコブレンツを指す「Rhenania」というラテン語名がドイツ文字で書かれています。家そのものは、半地下の壁によって形成された石造りの基礎の上に建てられています。レンガに加えて、一部の外壁は装飾的な細部を持つ塗装された木材で覆われており、また漆喰の上に

半木骨構造も見られます。家の前面の角にある印象的な 3 階建ての塔の頂点には、遠くからも見える塗装された鉄製の風見鶏があります。複雑な寄棟屋根はダイヤモンド模様のスレートで覆われています。

印象的な花崗岩の玄関ポーチは前室へと続き、そこから天井の高い中央ホールと大きな木製の階段へとつながっています。広々としたリビングとダイニングルームは、木製の引き戸のある大きな開口部で繋がっており、1 階に大きな開放感を与えています。リビングルームの一角には、床が一段高くなっているこぢんまりした手すり付きの区画があります。ダイニングルームには、ユーгентシュティールの装飾的な真鍮の蝶番が付いた造り付けの木製サイドボードがあります。サイドボード、木製の壁パネル、ドア枠はすべて、コブレンツのシュトルツェンフェルス城を思わせる城壁風の装飾で上部が飾られています。日当たりの良い八角形の出窓のある書斎は、入口ポーチの隣に配置されています。これにより、家の主人が誰が近づいてくるかを見ることができるようになっていました。ここの床も高くなっており、ユーгентシュティールの影響がみられる塗装されたパネルの手すりがあります。1 階には他に、優雅に設えられた応接室と広々としたベランダもあります。

2 階は家族の私的空間に充てられており、装飾はより控えめです。広い主寝室と子供部屋、客室、朝食用の小部屋、ガラス張りのベランダがあります。これらの部屋はすべて 2 階のホール

に面しています；このホールは元々ビリヤードルームとして使用されており、その目的のために設置された 2 つの吊り下げ式照明器具が残されています。塔の最上階には、屋根裏部屋からのみアクセス可能な小さな展望室があります。

1914 年に第一次世界大戦が勃発した際、トーマス家はドイツで休暇中であり、神戸に戻ることができませんでした。家は売却され、後年には研究所や中国人学校として使用されました。

1978 年 1 月、風見鶏の館は重要文化財に指定され、神戸市によって購入されました。

1995 年の阪神・淡路大震災で被害を受けましたが、その後修復されました。2023 年には耐震補強工事が開始されました。